

謝冰心の作家魂

——一片の氷心

はじめに

謝冰心（一九〇〇—一九九九）の『寄小讀者』初版が出版されたのは、一九二六年の五月のことであった。その「通訊一」を書いたのは、早くも二三年（以下、一九〇〇年は省略する）の七月二十五日であるから、八十年以上も前のこととなる。

この『寄小讀者』は、冰心（以下、冰心と略稱する）が何歳ぐらいの兒童を相手として想定していたのか、確定するのは極めて難しい。冰心自身、何も何歳から何歳ぐらいまでの子供に宛てるのだと嚴密に決めていたわけではないに違いない。ただ、第一信の呼びかけである「似會相識的小朋友們」という言葉からして、少しひねった言い方ではないか。

◇似會相識的小朋友們：

我以抱病又將遠行之身，此三兩月內，自分已和文字絕筆；因爲昨天看見『晨報』副刊上已特闢了『兒童世界』一欄，欣喜之下，便借着軟弱的手腕，生疏的筆墨，來和可愛的小朋友，作第一次的通訊。

在這開宗明義的第一信裏，請僑們容我在僑們面前介紹我自己。我是

謝冰心の作家魂

萩野脩 二

僑們天真隊裏的一個落伍者——然而有一件事，是我常常用以自傲的：就是我從前也曾是一個小孩子，現在還有時仍是一個小孩子。

參考までに倉石武四郎譯を擧げる。

◇小さい「お友だち」のみなさま——「お友だち」にしていただいても好いでせうね、みなさま——

わたし、病氣もしてゐましたし、それに、やがて遠いところへ出かけるからだですから、この二三箇月は、文章など書く機會が無いものと、あきらめてゐました。ところが、きのふの『晨報』の附録を見ますと、「子どもの國」といふ欄が、ちゃんとできてゐるではありませんか。わたし、すっかり嬉しくなつて、さっそく、このかぼそい手に、久しぶりの筆をとりあげて、かはいいいみなさまに、最初のおたよりを、さしあげることになりました。

このそもそも最初のおたよりを利用して、わたし、まづ自己紹介をさせていただきたいと思ひます。わたしは、みなさまがたの無邪氣な社會から落伍したものでございます。けれど、一つだけ、わたしが、いつも自慢にしてゐることがございます。それは「わたしも昔は子どもであつて、今でも、ときどきは、やっぱり子どもである」といふこ

とです。(傍點はママ。繰り返しの符號は使わなかった。)

『寄小讀者』の第一信の最初の部分を、倉石譯で讀むと實に滑らかに優しい文章のように見える。特に、漢字を使うことを意圖して制限した翻譯であり、長谷川時雨に「婦人のことばとしてさしつかへないやうに修正していただいた」と言う。

しかし、この原文の方の文章は、小さな子供自身が讀んで、讀みやすい文章とは思えない。文體が難澁であるというわけではないが、もって廻った言い方をしている。使われている語彙も随分と練れた優雅な言葉であつて、古典の素養を必要とする。だから、小學校の高學年から、中學生、そして高校の低學年ぐらゐまでを想定しても良いと思われる。冰心の一番下の弟が當時十三歳であつたから、その年齢前後の子供を想定してはなからうか。一九四〇年代には冰心の作品は中學校の教科書に採用されていたのである。その上、第四版の序文では、冰心自ら、「這書中の對象、是我摯愛恩慈的母親。」と、母に宛てて書いたものと言っている。意識としては、「小朋友們」などを念頭に置いていたのではなく、二十三歳の大學院學生としての冰心が母親に宛てて書いたもの、つまり兒童文學に限定できるものではなかつたのである。

とはいへ、内容としての新奇さと、母の愛という安心さも手傳つてか、この『寄小讀者』は兒童に廣く歡迎され、版を重ね、冰心の代表作の一つになり、彼女に對して、兒童文學作家という評價が定着した。『寄小讀者』が評判良かったこともあつて、『再寄小讀者・通訊一』四が、四二年十二月から書かれた。かなり抽象性の高い内容で、「友情について」とか「生命について」といったやうに、テーマを決めて語っていた。

これは重慶『大公報』の紙面を借りる形で書かれた。抗日戰爭期、國民黨支配下の束の間の時間を利用して書かれたものであつた。冰心としても自分たちの經濟的生活維持のために文章を書かねばならなかつた時期である。一説に據れば、續きは日本に行つてから書く豫定であつたとも言ふ。いずれにせよ四篇だけが残されているのだが、この中斷は戰爭という事が大きな原因であつたと言えよう。

冰心は『寄小讀者』出版の三十年餘り後、五八年三月から、二十篇の「通訊」による『再寄小讀者』を書いた。ここには、後述するやうに、新しい中國の文藝界に一輪の花を添えようとする彼女の自負と責務とがあつたに違いない。また、彼女は少年先鋒隊などの接觸を通じて、「小朋友們」という言葉の對象を九歳から十五歳までの少年先鋒隊員の年齢と同じに定めたと思われる。大體小學校の三年生にもなれば、大人の本棚から長編小説、例えば『西遊記』『三國志』などを取り出して、獨りで讀むことができることを知つた。冰心自身が小さい頃、こういう小説を拾ひ讀みしたのであつた。

念のために言えば、中國政府は五二年十月一日に「政務院關於改革學制的決定」を公布し、小學校の學制を、それまであつた初級と高級の二つを併せて、五年一貫制にした。尤もこの改革はソ連の制度を模倣したもので、いくらか中國の現状と不都合な點が出たため、五三年十一月二十六日には「整頓和改進小學教育的指示」を政務院は出して、再び四二制に戻し、初級四年、高級二年としていた。しかし、北京などの都市部では、五年制が浸透していたようである。

尙ついでながら、「文革」後、冰心は『寄小讀者』として「通訊」を七八年三月から十篇書いている。「文革」終息後の作品として、そこには思想解放の新しい喜びと、思いを若き世代に傳えようとする意

氣込みがあるような氣がする。この時は、すべて「親愛的小朋友」と呼びかけ、「僑們的朋友 冰心」と最後に署名しているが、解放されて、晴れて自由に書けるといふ冰心の氣持が反映しているように思える。そして、對象としての讀者に、明らかに小學校高學年以上を想定しているように思える。

冰心における「小朋友們」への手紙は、上述のように、『寄小讀者』以後、第二、第三があるのだが、それは彼女の留學、歸國、「文革」といった節目節目の作品となり、時期的にもメルクマールとなるような氣がする。

このうち第二の『再寄小讀者』は、新しい中國に歸國した冰心が書いた二番めの作品であり、冰心の態度と作家としての姿勢とが顯著に見られる作品であるように思う。『再寄小讀者』を書いた時には、折から始まった「百花齊放、百家爭鳴」の動きから、反右派鬭争を経て大躍進への動きがあり、當時の作家達のいろいろな模索がある中で、冰心が冰心なりの選擇と生き方を示した作品と見られるように思う。

そこで、ここでは、主に、歸國後に書いた作品二つを扱い、それぞれ作品前後の冰心の状況を再現し検討して、冰心の作家としての苦心を探ろうと思う。

一、歸國後の情況概略

(一) 兒童文學者として

冰心夫妻が、一九五一年アメリカのエール大學の中國文學講義擔當を口實に日本を出發しながら、急遽道を變更し、香港を經由して廣州に入り、天津から北京に入ったのには、當時外交部長を兼任していた周恩來總理の援助があったという。そして、當時の海外から歸國した

謝冰心の作家魂

作家たちは、新しい中國の變わりように期待した。例えば老舍の大陸への歸還にもそういう期待があり、また周恩來の手曇があったという。それは、抗日戦争を辛抱して戦った新しい中國に自分たちの能力が生かされ、どのように貢献できるかということでもあった。と同時に、新しい政權の中國共產黨への不安と期待の入り混じった感情でもあった。

冰心の歸國前後の複雑な経緯は、冰心の書き残した文章から再現した、卓如『冰心全傳』に詳しい。今それに據れば、周總理から差し向けられた車で呼ばれて中南海で會見し、日本での活動の報告をし、承認を得たという。

◇總理極其親切地招呼我們在他旁邊坐下，極其詳盡地問到我們在外的情况，我們也就漸漸地平靜下來，歡喜而盡情地向總理傾吐述說了我們的一切經歷。

自分たちの過去の經歷についてすべて申し述べる冰心夫婦に對して、周總理はこういったと言う。

◇僑們在日本，爲我們黨，爲我們國家做了許多有益的工作，僑們是有貢獻的。

「あなたたちは日本で、わが黨やわが國のために多くの有益な仕事をしてくれた。あなたたちは貢献してくれたのですよ」

と周總理が言ったということは、中國政府そのものからお墨付きを得たとと言っても良いであろう。

これは歸國した翌年の五二年の初夏の夜のことであるという。

冰心と夫の吳文藻は、ここで始めて新しい中國での市民權を得たと見えよう。

冰心は自分を兒童文學の面に主力を置くことに決めていた。

◇在總的路線中、我選定了自己的工作、就是：願爲創作兒童文學而努力。(中略)在我的作品中、我要努力創造正面藝術形象、表現新型人物、讓新中國的兒童看到祖國的新生的、前進的、蓬蓬勃勃的力量、鼓舞他們做一個有教養的、樂觀的、英勇剛毅的社會主義社會的建設者。このように、冰心は自らを兒童文學者として位置づけたし、それがごく自然に受け入れられたのには、一九二〇年代の『寄小讀者』という元手があったからと言えよう。

冰心夫妻は二年間ほど學習をして、五三年十月には夫の吳文藻が正式に中央民族學院の教授に配屬された。冰心自身もその年の九月二十三日から十月四日まで開かれた「中國文學藝術工作者第一次代表大會」の代表に選ばれた。彼女は丁玲と老舍の紹介によって、中華全國文學工作者協會、すなわちこの大會後改稱された、中國作家協會に加入したという。

五四年九月、『冰心小説散文選』が人民出版社から出版された。その「序」の文章は、まるで自己批判書のように、この選集に收めた二〇年代から四〇年代までの、小説十六篇と六つの散文の限界を述べている。ここに收めた過去の作品は社會の暗黒を暴露したが、光明を見つけられず、狭隘な家庭の枠内に留まり、階級社會では實行できない「人類愛」を描き賞賛した、と。

だが、自分の本が公的に出版されたということは、冰心が新中國の作家として受け容れられたことを示す事に他ならない。冰心は、五四年の九月には、「第一屆全國人民代表大會」の代表に選ばれた。これが彼女の政治的立場も確立したと言えるのかもしれない。

冰心は、少年兒童文學作品が大きく落ち込んでいる現状を指摘し、五六年六月一日の「兒童節」までに必ず作品を書き上げようと、他の

作家に呼びかけるなど、兒童文學のために、聲を張り上げた。^②

(2) 外遊

冰心は、早くも五三年十一月二十七日から、丁西林を團長とする中印友好協會訪問團に従い、中印友好協會成立大會に参加した。歸國したのは、翌年の五四年二月四日のことである。彼女はそれ以後、しばらくの間、英語からであるが、M・R・アナンドの『印度童話集』やタゴールの『ギダンジャリ』を譯している。

冰心の外遊については、「付表I 冰心の外遊」を参照していただくことにする。

當時においては國外に出ることは一つの特權(優遇)であったから、冰心の外遊が頻繁であったことが目につく。さらに、外國を旅行する事は、かなりの體力を必要とする。二十歳代で大病をした冰心が、三箇月にもわたる激務をこなし、さらに國內の行事をもこなし、且つ文章を書き續けているということに驚愕と敬意とを感じざるを得ない。

二、「陶奇的星期日記」の世界

彼女が手をつけた最初の作品は、五六年五月に出版された『陶奇的星期日記』^③である。兒童文學というジャンルの小説である。

以下、この作品の内容について紹介する。

(1) 主人公・陶奇のこと

主人公は、陶奇という名前の女の子である。名前は普通から「Taogqi」すなわち「淘氣」(腕白、いたずら)とかけている。名前の由来は、赤ちゃんの時、目がくりくりと動き、少しも落ち着きがないところか

ら來ているようであるが、この日記に出てくる陶奇は腕白で、いたずらなところが少しもないと言っても良い。確かに出だしの張先生の陶奇を教導するところでは、陶奇は校長先生のまねをしたり、級友のあだ名をつけるのがうまいそうである。また、お小遣いをもらった時には、つい嬉しがつて夜店で暴飲暴食をしてお腹を壊して、發熱までしたことがある。

張先生は陶奇の意地っ張り^①と粘り強さを見抜き、日記を毎日付けさせる。陶奇は嫌々ながらも日記を毎日四〇〇〇字以上書くという約束を守り、日常のことを書き付ける。以後の日記に據れば、陶奇はシガポール華僑の娘・曾雪皎の國語の學習を見てやったり、資本家の娘・王瑞萱と遊んで、王瑞萱の労働嫌いな生活態度やマナーを指摘し、直すようにする。と言っても、いつも教訓的に陶奇が指導するわけではない。寧ろ、陶奇は、わからないところや、氣の進まないところは、そのまま事態を放り出して、突っ込まない。これが、『陶奇的暑期日記』の一つの特色であると思える。

『陶奇的暑期日記』は、社會の矛盾や事態に對して、子供の主人公が疑問を持ち、年齢相應の思索をし、思考を深めるといふような形を取らない。きわめて日常的な生活の智慧、例えば針に通す糸は長くはないけないなどの智慧が描かれるだけである。

主人公・陶奇は日記に現われる形として、「私」として出てくる。「私」は、家庭内の最年少の子供として、あくまでも外的世界をまだ良く理解していない。多くのことを知り、學び、成長し向上しようと燃えている人物である。常に、保護され教導されるべき人物である。外的な刺激は、日常的にやってくるが、常に祖父母をはじめ母親や姉の解説や教導で、解決され、少年先鋒隊員として立派に社會に役立つ

謝冰心の作家魂

隊員となるよう進んでいく。^②

一つの地域社會に、周りから教え導かれながら生活していく「私」には、新しい社會に飛び込んだ氷心自身が投影されているであろう。「私」は熱心にこの新しい社會のうちに成長し、良い子になろうと願っている。その成長を周りもゆっくりと善意で見守っているという圖式は、氷心自身の願いであつたと思われる。先に引用した、第二次文代會での發言、「鼓舞他們做一個有教養的、樂觀的、英勇剛毅的社會主義社會的建設者。」^③というのも、「他們」は、「小朋友們」であるというよりも、寧ろ氷心自らのことを指していると捉える事が出来るよう。

(2) 登場人物

陶奇の家の構成員としては、父親は作家で、今、撫順の炭礦に體驗學習に出かけていて夏休み中は歸つてこない。母親は醫者で、毎日遅くまで歸宅できない。おじいさんとおばあさんがいて、孫娘の面倒を見ている。少年先鋒隊員である姉・陶眞がいて、彼女が陶奇の勉強や活動、人との對應などすべての面での模範である。

毎日休みなくつけられた日記の世界には、日本から廣州に歸國する叔母とその娘・小秋が登場して、北京に二十日間ほど同居する。陶奇は、小秋を案内するという名目で、北京の名所舊跡をおじいさんに連れられて見學參觀する。これは日記に廣がりをもたらし、見聞を廣めている。ここで、意識されているのは、日本との關わりであろう。^④

同級生達にも、時代の特色が現われている。先ず、天津の資本家というのが出てくることに驚かされる。王瑞芬・王瑞萱という姉妹の父は、天津に工場を持つ資本家であり、この町の一角の大邸宅に住んで

いる。母親は、王瑞萱が登校する時、三輪車②に乗って行かせる。それで、同級生の李春生たちが、瑞萱を囂したて、いじめめる。

また、シンガポールの華僑の娘・曾雪姣が親戚・孫家英の家に獨り同居して勉強している。彼女は足が悪く、三輪車に乗って登校するが、彼女に對しては、李春生たちもからかったりしない。

五一年十一月から翌年八月にかけて行われた「三反五反運動」について簡単に言うなら、五一年十一月からの黨員幹部の汚職、浪費、官僚主義に反對する三反運動に續いて、五二年一月から、ブルジョア階級の贈賄、脱税、國家資材の横領、手抜き仕事とごまかし、國家經濟情報の竊取に反對するという五反運動が始まった。民族資本家は、この三反五反運動を通じて社會主義的改造の對象となった。五四年に公私合營とされ、五六年二月には、國務院「公私合營企業の固定利息實施辦法に關する規定」により、一律五%の定額利息を五六年一月一日より七年間支拂うこととされた。のち、十年間に訂正されたが、「文革」により、すべて廢止された。

民族資本家は、五星紅旗の一つの星が象徴するように、人民共和國を構成する要素の一つであった。しかし、その後の展開は、必ずしも社會の構成員として迎える方向には進まなかった。その民族資本家を改良し、社會に取り込んでいこうとするのは、社會主義の理想が保たれていた時期のことであると言えよう。

『陶奇的暑期日記』になぜ、資本家の娘などを登場させたかについては、推測するしかないが、資本家としての王家が持っている家屋の事がある。廣く幾間もある屋敷に住んでいる王家に對して、同じ町内の家族は、たとえば李春生一家は、五人で住んでいて、子供が母親の内職を邪魔してしまう。そこで、王家の離れの部屋を町内會が借り

て託兒所にしたいという動きがある。しかし、王はその部屋を自分の祖先を祭る場所として使用し、貸さない。そのような問題が起きている時、偶然王の娘・王瑞萱が北海公園で溺れそうになった。それを李春生が助けたので、王は自分の屋敷の一部を託兒所として貸し出すことを承諾する。

話は、李春生という同級生の行爲と性格を賞賛し、認め、九月の新しい學年になったら、春生が少年先鋒隊に入るであろうことをうかがわせて終わる。同時に、實際の救助活動から、頑迷な資本家が労働者階級の獻身的な態度を理解し、資本家も自分のできることを地域の人に還元するという展開になる。

資本家であろうとも、地域に生活し、子供達が新たな世界で生きていく以上、その生活空間で融合を目指し、生活改善を目指さねばならない。そういう風に話は展開してゆくが、これは、逆に言えば、生活態度を改善しさえすれば、資本家といえども社會の構成員の一員として仲良く生活できるという樂觀的な思考があることを示している。資本家の娘を登場させ、彼女らが暮らす地域社會に融合し、社會公認の理想の形態である少年先鋒隊入隊を目指す態度に展開していくことは、上述のように、氷心の願いを込めた新社會の姿であつたらう。そういう社會を描くことは、氷心の願いの表出であり、最も條件の悪いはずの資本家の登場が必要であつたに違いない。

一見すると、何かそぐわない異分子的な資本家の一家などを登場させている點が氣になる。むしろ、労働者の息子である李春生という腕白な男子生徒を中心に話を進めていけば、よりすっきりと締まった話になつたのではないかと思う。粗野で不出來な同級生の向上の話という構成が兒童文學として當然豫測される。

子供の目を通して、社會の構成員の日常の姿を描くことは、冰心が日常的な生活の記録としての日記という體裁を採用した時から、決定付けられたことであつたろう。通常の生活人の生活というものにある社會の善意を新しい社會の基本にすえて見ていきたいとする作家としての態度がなければならぬことであらう。だから、陶奇という「私」が前面に出て、話を引っ張っていくことにせず、李春生などの形象を通じて、浮かび出る資本家の動きを描いたところに、冰心の作家としてのあり方を感じる。

すなわち、賞賛ばかりの作品の中で、冰心のこの作品も一見すると、新中國禮贊の列に屬する作品であらうが、決して無理な、とつてつけた希望と理想を書かずに、社會の異分子ともいえる人間を、ごく當たり前に描いているところに、私は冰心の持つ作家精神のようなものを感じるのである。

ここで、私は例えば陸文夫が「小巷深處」という小説で、解放前の妓女が解放後に労働者として働き、若い大學出の戀人を見つけて幸せになろうとする小説を書いたことを思い出す。解放前の虐げられた者が幸福を掴んでこそ、解放の意義を表出できるところに、陸文夫の作家精神があつた。この精神が、冰心にもあると感ずるのである。一片の氷心を感じざるをえない。

また、華僑の娘は地域に受け容れられるための人物として登場している。本人の勤勉さが周りから好感を持って、援助を受ける存在として出てくる。ここにも冰心の自己投影があるかもしれない。同時に、これは中國のとるべき對外姿勢を暗示し、周りにいる中國籍の者や、近隣諸國との友好善隣を願うことの現れであらう。少なくとも、外國へ親善旅行に何度も行く冰心の、かくあるべしとする希望の反映であ

謝冰心の作家魂

るように思える。

時代背景の顯著な事柄としては朝鮮戦争がある。丁度、五三年七月二十六日に休戦協定が結ばれた。陶奇の姉陶眞は、「抗美援朝」の實踐として朝鮮に派遣された解放軍兵士に慰問の手紙を書き送っている。そのほか、ソ連の經驗に學ぶことの實踐が、例えば醫者の母親が灰色の制服を脱いで、花柄の明るいブラウスを着て、患者の氣分を明るくさせる運動に参加することや、勤務時間前にロシア語を學ぶことなど、實に良く時代が反映されている。

さらに一つ注目しておきたいことは、范祖謀の形象である。彼の形象は、あたかも知識人のミニモデルのようである。勉強が良くできるし、泳ぎもうまい。しかし、いざ行動する時になると、實行できなかった。彼は、李春生から、このように言われていた。

◇回頭又對范祖謀說：「走，我們到什刹海游泳去吧。」范祖謀皺起眉頭說：「我今天沒有空，還得到少年之家去學畫呢。」林宜說：「你不是答應教給我游泳的嗎？我這一暑假就想把游泳學好。」李春生向前說：「我教給備，那有甚麼？我游得也不賴！」范祖謀說：「好，備教給他吧，本來我游得也不怎麼樣。」說完，就推自行車走了。／孫家英看他出了門，就說：「范祖謀這人就是自私！」曾雪皎扶着門框站着，說：「人家學習得可好，備看他哪一樣不是第一呀！」李春生扭過頭去，說：「他就是自私，太自私了！」第一，有甚麼用處？人家若有甚麼難題問他，他就說不會；等到張老師在課堂上一問，他就都會了！人若問他爲甚麼不幫助別人，他會瞪眼罵備，甚麼，依賴性太重，啦！自己不努力，啦。我呀，寧肯得箇大雞蛋，也不去請教這位自私鬼！」林宜笑說：「他也是太自私，備也是不努力，我們都得團結互助才好。備就教給我游泳去吧。」

ここに言われる「自私(自己主義)」或いは個人主義への批判は、當時知識人への批判の最大論點であった。例えば、老舍の『駱駝祥子』の書き直しなどにもそれが現われている。

◇可是、我到底還是不敢高呼革命，去碰一碰檢查老爺們的虎威。我只在全部故事的末尾說出：『體面的、要強的、好夢想的、利己的、個人的、健壯的、偉大的祥子，不知陪着人家送了多少回殯；不知道何時何地會埋起他自己來，埋起這墮落的、自私的、不幸的、社會病胎裏的產兒，個人主義的末路鬼！』(傍線は原文のまま)

「自私」を去り、「團結互助(みんなで助け合う)」が、『陶奇的暑期日記』のテーマであるが、社會の進むべき方向として、自己主義を捨てて、みんなで助け合うという指向が存在していた。この方向性の安定と漸進的な進行が、信頼と樂觀とをもたらしていたと言える。冰心の新しい中國の社會主義に寄せる期待もここにあったように思える。

(3) 背景

既に具體的な事柄として、「三反五反」の運動や、朝鮮戦争があることを述べた。資本家としての王家から見れば、労働者階級の者の犠牲的な行爲が娘を救ったことで、空いている離れを託兒所として使用することを許可する口實になった。

陶奇から見れば、託兒所の問題が母親達の口から話題になっっていることはわかるものの、問題の進展には直接關わりあわなかった。

◇午飯後孫家英的母親孫大娘來了。她是我們胡同的婦女代表，來找媽媽談街道托兒站的事，我聽着沒甚麼意思，就自己回屋去睡午覺。

このような書き方で、政治キャンペーンとしての運動が、モロに子どもの世界に、すなわち、この横丁に入らないようにしているのではあ

る。苦心のところであると思える。時代的背景の動きは、いつも主人公を取り巻いているものの、まだわからぬもの、親の世代なり誰かが、解決するものとして存在する。

朝鮮戦争の休戦調停に關連して、八月十一日の日記には、姉が急遽歸國した彭德懷將軍を北京驛まで迎えに行ったことが書かれている。

◇姐姐說彭德懷司令員氣色很好，講話的聲音很洪亮，穿的是灰綠色軍服，一箇勳章也沒有戴，她沒看見有志願軍叔叔跟他回來。／姐姐也沒有看清楚。彭司令員得了那麼多的勳章，哪一箇都不戴呢？

この日の日記は、やや唐突である。「彭司令員得了那麼多的勳章，哪一箇都不戴呢？」などという素朴な疑問は、子どもの陶奇だから抱けるのであろう。彼女は暴飲暴食から下痢をして家で休んでおり、直接驛まで歓迎の迎えに行った姉から話を聞いたのである。普通に考えられることは違ふ事態に對する、このような疑問を淡々と書き付ける事が、却ってこの日記の歴史的印象を感じさせることになるかもしれない。

冰心の描いた陶奇の生活空間は、確かに冰心の娘の姿を投影しているであろうが、それよりも、冰心が生活していくための居心地の良い空間の構築であつたろう。「私」は新しいこの社會主義建設のために、自分のすべての力を出そう、とする。したがって、過去の政治的おさらしもなくしてはならない。

◇今日は「八一」建軍節。一早起來，姐姐就對我和小秋講建軍節的故事，還把她給她們黑板报寫的稿子給我看，上面說：『在一九二七年的春天，在祖國革命勢力發展得十分強大的時候，偽裝革命的蔣介石，轉過頭來向革命者進攻。那年的四月十二日，蔣匪幫在上海屠殺了大批的共產黨員、革命工農和學生，使革命戰爭受了挫折。爲了挽救革命，

同年の八月一日、朱德、周恩來、賀龍和其他的同志在江西南昌，率領革命軍三萬多人，武裝起義。不久這支軍隊就在井岡山和毛主席領導的革命軍會合，成立了中國工農紅軍第四軍。從那時起，中國人民就有了自己的武裝。就是這支越來越強大的人民解放軍，二十六年來，艱苦的鬪爭，終於把蔣匪和帝國主義勢力趕走，解放了我們，使我們今天能過這樣和平快樂的日子。我們應該感謝他們，熱愛他們，向他們學習，愛祖國，愛人民，和克服困難的勇敢頑強的精神，爲建設社會主義社會而獻出自己的一切力量。”

話の筋からすれば、必ずしもこのような解放軍についてのまとめが必要であったか疑問である。念のために言えば、倉石譯では、この部分はそっくり削除されている。しかし、私にはこのような纏めは是非とも必要であつたろうと思う。話の筋のためというよりも作者である冰心にとって必要であつたのだと言いたい。人民解放軍に對するこのような要約は、冰心の提出する答案のように、私には思える。姉の書く「黑板报」の原稿を寫し取るといふ、かなり回りくどい、慎重なやり方であるが、このような要約は、當然冰心の人民解放軍に對する要約、及び人民共和國に對する要約、中國共產黨に對する要約と見なされ、冰心の學習の成果として、政治評價と結びついていたであらう。そのように考えるのならば、冰心の作品が賞賛ばかりであるという側面も、少しく吟味し直しても良いのではないかと思う。

三 『再寄小讀者』を巡つて

『陶奇的暑期日記』は、一九五六年五月に出版された。一體いつ頃書かれたのか、實はよくわからない。五四年か五五年には、書き終えていたらしいが、自ら手を加えてやっと出版に漕ぎ着けたように思う。

謝冰心の作家魂

先に述べたように、冰心は丁玲と老舍の紹介によって、中國作家協會に加入した。そして、五三年九月には「中國文學藝術工作者第二次代表大會」に参加し、二十五日からの「全國文學工作者代表大會」にも参加した。そこで自らを兒童文學者として位置づけたことは、既に述べた。冰心は、五三年十一月にインドを訪問して以來、次々と外國に飛び立って行った。若いころから病弱であり、外見上小柄で華奢な彼女が、休む間もなく外國に行くのは、かなり異常なことにように思える。簡単に、冰心の外遊を五三年から五六年までを追ってみると、先に挙げた「付表Ⅰ 冰心の外遊」のようになる。

この「付表Ⅰ」からわかるように、外遊をしたことのない作家が多くなる中で、冰心はほぼ毎年のように外遊している。これは、かなり冰心が重寶がられていたことを示すものであろう。その理由の一端には、彼女の英語の語學力が挙げられるであらう。また、過去に作品があることに加え、共產黨員ではないことも挙げる事が出来るかもしれない。彼女は「付表Ⅰ」からわかるように、五六年七月に、中國民主促進會に夫婦そろって加入している。

『再寄小讀者』は、最初『人民日報』に掲載された。「付表Ⅱ 『再寄小讀者』」に據れば、『人民日報』の編集部が冰心に『寄小讀者』と同じようなものを書くよう求めたらしい。「通訊一」と同時に載った

「編後小語：歡迎『再寄小讀者』」に據れば、冰心に新時代の故事を語ってもらふこと、及び、冰心は間もなく西歐に行くから自然の景物や旅行の見聞を書き送って欲しいことを述べている。また、大躍進は詩の時代でもあるが、散文も躍進したいとも述べている。

折から始まった農村での大躍進運動に作家協會も参加することを呼

びかけ、それを氷心も受けたのだった。氷心は、三月には、十三陵ダムの勞働に参加し、三月十一日に「通訊一」を書いた。二十一日にヨーロッパに出かけているので、それまでに三篇とかなり多く書いた。この間、たとえば、二月二十日には「我們這裏沒有冬天」などの散文も書いているのであるから、どんなに懸命に作家協會の呼びかけに應じようとしたかがわかる。冬の嚴寒が過去には人を呻くようにさせたが、現在は家も衣服も備わり、暖かさがあるという文章を、冬がないとまで表現するところに、氷心の必死な姿を見る思いがする。ヨーロッパのイタリアに着いて以後、移動中にもかかわらず、「通訊」をせっせと書き送る。「通訊四」以後、氷心は現地の勞働人民との交流を通じて中國の先進的な様を描くが、主として現地の歴史や文化の紹介であった。ところが、「通訊八」からは掲載が、『兒童文學叢刊』に代わっている。「人民日報」は、反右派鬪争の紙面ではいっばいになってきたのであろう。

氷心は、自分の文章で、夫・吳文藻が五八年四月に右派分子とされ、中央民族學院の主任の職を解かれたと書いている。王炳根・氷心文學館常務副館長は、吳文藻は五七年十月に右派とされた、と言うが、それがいつであれ、「反黨反社會主義」とされたことに對する憤慨と鬱憤は簡單にはすすげなかつたであらう。それにもかかわらず、氷心は外國から「再寄小讀者」の「通訊」を送ったのであった。しかし、氷心の淡々とした、外國文化教養に關する「通訊」も、「通訊八」以後、一層新しい時代への貢獻度が強くなるようである。それは、「付表Ⅱ」に記載した通訊の表題、「僑們多麼幸福」、「社會主義無限好、資本主義一團糟」などだけからも十分伺えることである。さらに例えば、「毛主席」或いは「毛澤東時代」という言葉の使用回数で見ても、な

らば、數量的にも顯著である。

通訊一〜七	〇回	通訊八	一回
通訊九、十	〇回	通信十一	五回
通信十二〜十五	〇回	通訊十六	一回
通訊十七	三回	通訊十八	一回
通訊十九	二回	通訊二十	〇回

「通訊八」は、『兒童文學叢刊』に掲載が變つた時であり、「通訊十一」は、これまた「兒童時代」に掲載が變つた時である。「付表Ⅱ」からわかるように、「通訊八」（五八年五月二日）から「通訊九」（五八年十月二十九日）までは、ほぼ六箇月近くの間隔がある。また、「通訊十」（五八年十一月二日）から「通訊十一」（五九年五月十一日）までも、ほぼ六箇月の間隔がある。この間は休載していたと言つて良いが、相變わらず國內活動も忙しかつた。その上、今回は、夫ばかりではなく、長男や弟の右派問題もあり、氣疲れのする毎日であつた。

「通訊十二」には、次のような文章もある。

◇就在這一天，在這麼一箇使人快樂高興的天氣裏，大家都特別想到僑們，學校裏的老師，幼兒園、托兒所的阿姨，僑們的父母，還有許許多多愛僑們的人……對了，還有毛主席！沒有等到僑們補充，我趕緊先說出來了！小朋友，一提到今天兒童的幸福生活，誰會把毛主席忘了呢？毛主席是最關懷最愛惜僑們的呵！

「そうでした！毛主席がいりました。あなた方が言い出さないうちに、私が先に言っておきましたよ！」云々という言い方は、實にユーモアに富んで面白いが、なにやら切羽詰つた息遣いが聞こえるようである。「毛主席はあなた達に最も氣を使い、最も愛していらっ

しやるのですよ！」などという言い方を冰心はこれまでにしたことがあったであろうか。せいぜい、今までは、國家の指導者たちという風な言い方であった。個人崇拜が強まった氣がする。

もう一つの言葉を見てみよう。それは「黨」或いは「共產黨」である。

通訊一〜十	〇回	通訊十一	二回
通訊十二	五回	通訊十三、十四	〇回
通訊十五	四回	通訊十六	一回
通訊十七	七回	通訊十八	二回
通訊十九	三回	通訊二十	一回

一つ引用しよう。

◇小朋友、僑們要怎樣做呢，就是要聽黨的話，聽老師、輔導員、父母的話，他們號召僑們做的，是爲了能使大家的生活更幸福更美好，使僑們的心身鍛煉得更健壯。

先生の話、輔導員の話、父母の話を聞くようにと、『陶奇的星期日記』では言っていた。『再寄小讀者』では、その前に「黨の話」がつかようになったのは、ある意味で象徴的なことかもしれない。

やはり、「通訊十一」には變化が見られよう。この變化についての、より詳しい追跡は、今回はしないが、五七年から始まった百花齊放、百家争鳴のキャンペーン、急激に變化した反右派闘争、そして、大躍進への變化に連れて、清楚な政治色の希薄な文章も、時代の禮贊を色濃くする文章へと變わっていく。他の文學者の文章と一見なんの變わりもない變化であるように思えるが、背後の身内の右派問題と關わらせるならば、そう單純ではない隠された苦惱と憤懣の感情があるように思える。だがこのことは、より精密な分析を經て言わねばならない。

謝冰心の作家魂

紙幅の都合上、今後の課題としたい。

あとがき

右派の問題で打撃を受け、冰心が再び筆を執って、兒童に向けて書こうとしたのは、周恩來への信頼があったからだと思う。今までも周恩來との出會いを二回は觸れたが、會議などでの接觸を入れれば、數度になるであろう。歸國時の周恩來の對應といい、反右派闘争時の冰心への援助といい、さらには、冰心が「文革」中の七一年八月に湖北の沙洋の五七幹部學校から急遽呼び出されて、北京に戻り、ニクソンの著書などの英語の翻譯に夫婦そろって行うようになったのも、周恩來の配慮であったという。

「付表Ⅱ」からもわかるように、五九年の五月三日、周恩來は北京の紫光閣で、文藝工作に二本足で進むことの報告をしている。冰心が五月十一日に再び筆を執って「通訊十一」を書こうとしたのも、「小朋友」の爲にはなく、わが身への決意であったかもしれない。「小朋友」に届けとばかり書く「僑的朋友 冰心」という署名に込められた一片の氷心を、毛主席と黨への言及が多くなればなるほど、感ずるのである。しかし、今は周恩來の知識人問題まで關係するこの問題には觸れないで置くことにする。

以上、多くの推測だけを述べてきたが、もう一つの推測があつて、それは五七年七月十二日の全國人民代表大會の會議での冰心の發言を巡る問題である。しかし、これも今後の資料公開を待って、觸れることにしたい。

注

- (1) 『寄小讀者』は、散文集、北新書局。一九二六年五月出版。未見。今、卓如編『冰心全集』第二卷、海峽文藝出版社、全九卷（豪華珍藏本）一九九年（以下、一九〇〇年は省略する）四月第一版第二次印刷 による。「第四版自序」は、二七年三月二十日に書かれている。詳しくは、拙論「冰心と『大海』——冰心試論」（『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、九二年三月、所收）を参照されたい。
- (2) 冰心の文章の引用は、原則として、卓如編『冰心全集』海峽文藝出版社、全九卷（豪華珍藏本）一九九年四月第一版第二次印刷 による。以下、『全集』と略稱する。ここは、『全集』第二卷、六一頁。
- (3) 謝冰心著・倉石武四郎譯『をとめの旅より 子どもの國のみなさまへ』（三省堂、昭和一七年七月二十日發行）一―二頁。
- (4) 同注3)の「あとがき」二―三頁。尚、長谷川時雨（一八七九―一九四一）は、小説家、評傳作家として活躍。『女人藝術』を主催して數多くの女性作家を育てた。『長谷川時雨全集』全五卷があり、岩橋邦枝『評傳長谷川時雨』がある。また、直木三十五に「長谷川時雨が卅歳若かったら」という文章もある。
- (5) 冰心自身も、例えば『小橋燈』後記（『全集』第五卷、三七六頁）では、「但是那些通訊也沒有寫得好。因爲剛開始寫還想到對象，後來就只顧自己抒情，越寫越『文』，不合於兒童的了解程度，思想方面，也更不用說了。」（しかし、あの通信もうまく書けていない。というのも、始めたばかりの時はまだ相手のことを思っていたのだが、後になると自分の氣持を述べるのにいっばいで、書けば書くほど、飾り立てる、ようになり、子ども達の程度に合わなくなった。思想面については、一層難しくなりました。）と言っている。
- 尚、新版『小橋燈』（人民文學出版社、七八年七月）には、この「後記」に變えて『小橋燈』新版後記が入っている。但し、『全集』第六卷、六五七頁の『小橋燈』新版後記』では、「英明領袖華主席和黨中央一舉」の言葉が抜けている。『全集』でも、このような改編が行われるという中國の政治的嚴しさに思いを致すべきことかもしれない。
- (6) 『雜誌』第十二卷第一期（四四年四月號）の、張愛玲や蘇青らが出席した「女作家聚談會」によると、冰心の作品は「國文教本」で讀まれたと觸れられている。そして汪麗玲は、冰心の『寄小讀者』が好きだと言って、「通訊七」の一部を暗誦している。この件については、鎌田純子關西大學非常勤講師の教示を受けた。記して謝意を表する。
- (7) 『全集』第二卷、三三七頁。
- (8) 『全集』第三卷、二四五頁の「通訊一」に始まり、四四年十二月一日の「通訊四」まで（『全集』第三卷、三四六頁）である。この後の續きは、日本で書くつもりであったとも言ふ。また、五八年からの通訊同じ「再寄小讀者」という題名を使ったのは、四〇年代に一度使用したことを忘れたからだとも言ふ。
- (9) 『全集』第五卷、一三頁より四三五頁にわたって、通訊二十まで。のうち、『小橋燈』（作家出版社、六〇年四月）に收められる。但し二十篇のうち十四篇のみ。未見。新版『小橋燈』（人民文學出版社、七八年七月）に據れば、通訊一―八と、十一―十六の計十四篇である。
- (10) 「我得了一條紅領巾」（『全集』第四卷、六二頁）に據れば、北京第四中學少年先鋒隊第十三中隊が、五三年十一月十四日に三名の隊員を派遣して来て、冰心を學校に招き、交歡會を開いたと言ふ。これ以後、冰心は第四中學と關係を持ち、少年先鋒隊との交流を内容とする散文を書いている。
- (11) このころの教育制度については、李國鈞・王炳照總主編『中國教育制度史』第八卷（山東教育出版社、二〇〇〇年七月）及び、小島麗逸・鄭新培編著『中國教育の發展と矛盾』（お茶の水書房、二〇〇一年七月）や頼連金『中國の教育と經濟發展——一九四九年から』（アジア文化總

台研究所出版會、九八年九月）などを参考にした。

- (12) 八一年六月二十七日に通過した、中國共產黨第十一屆中央委員會第六次全體會議の、「關於建國以來黨的若干歷史問題的決議」の定義に従う。「一九六六年五月至一九七六年十月の『文化大革命』、使黨、國家和人民遭到建國以來最嚴重的挫折和損失」という。

- (13) 『全集』第六卷。七八年五月五日の「通訊一」より、八〇年一月二十三日の「通訊十」までの十篇。

- (14) 留學、「文革」はわかりやすいが、歸國というのは、期間的にも長く内容も複雑である。だが、冰心自身が次のように言っていることを参考にした。「現在回想起來、在東京の一段時間、是我們生命中的一箇轉折點。」（關於男人）（人民文學出版社、八八年二月。『全集』第八卷。「七我的老伴——吳文藻（之二）」四四頁。）

- (15) 「七 我的老伴——吳文藻（之二）」『全集』第八卷、四三頁。や、「周恩來總理——我所敬仰的偉大的共產黨員」『全集』第九卷、一一四頁）などで冰心自身が書いている。

- (16) 老舍「由三藩市到天津」『老舍全集』第十四卷、四一一頁）をはじめ、番志高「老舍在美國」『明報月刊』第十二卷第八號、一七頁）などを参考にした。この件については、杉本達夫早稻田大學教授、及び、日下恆夫關西大學教授の教示を仰いだ。記して謝意を表す。

- (17) 卓如「冰心全傳」上下、河北教育出版社、二〇〇二年一月。

- (18) 同注15)の「周恩來總理——我所敬仰的偉大的共產黨員」『全集』第九卷、一一七頁。

- (19) 卓如「冰心全傳」下、九頁（河北教育出版社、二〇〇二年一月）。

- (20) 「歸來以後」『全集』第四卷、三〇頁。これは、九月二十三日から十月四日まで北京で開かれた中國文學藝術工作者第二次代表大會での發言である。

- (21) 范伯群・曾華鵬「冰心評傳」（人民文學出版社、八三年四月）一九三

頁。

- (22) 「冰心小說散文選集」自序（『全集』第四卷、七二頁）。なお、この序については、拙論「冰心と『大海』——冰心試論」（『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、九二年三月、所收）で觸れた事がある（五二七頁）。

- (23) 「一人一篇」『全集』第四卷、二〇二頁）など。

- (24) （印度）穆・拉・安納德著「印度童話集」『全集』第四卷、八五頁）や、（印度）泰戈爾著「吉檀迦利」『全集』第四卷、一四一頁。このほか、インドの女流詩人・Amrita, Pritam（安利塔・波利坦）の詩を譯す。（『全集』第四卷、三七八頁など）。なお、「印度童話集」は、『印度民間故事』と名を變えて五五年五月に上海少年兒童出版社から出され、八月には、『石榴女王』と名前を變えて、世界民間故事叢書の一つとして、少年兒童出版社から出版された。

- (25) 『陶奇的暑期日記』（上海少年兒童出版社、五六年五月、未見）。のち、「小橋燈」に收める。今、『全集』第四卷、二四五～二七七頁による。なお、日本語譯に、倉石武四郎譯「タオ・チーの夏休み日記」（岩波少年文庫一四三、岩波書店、昭和三十一年七月）がある。

- (26) やや唐突ではあるが、冰心が陶奇という少女を通じて他者に自分を見せる構造に、レイ・チョウの言う「見られる」という戦略」を感じる。レイ・チョウ（周蕾）著、本橋哲也・吉原ゆかり譯『プリミティヴへの情熱——中國・女性・映畫』（青土社、九九年七月）。

- (27) 同注20)。「歸來以後」『全集』第四卷、三〇頁。

- (28) 日本との戦争については、例えば「陳姨說：『那倒不、一般日本老百姓也是反對戰爭的。……』（『全集』第四卷、二七二頁）とあるように、一般の日本人は戦争反對であったことを言う。この陳おばさんの夫も、日本で侵略戦争反對の運動に参加した為、憲兵に捕まり、殺されたと言

(29) 人力でこいで客を乗せる三輪車。運轉手が前でこぎ、後ろの座席に客を乗せる。電動式のものも、のちに出来た。日本では「リントク」とも言った。

(30) 三反五反運動については、今、『岩波 現代中國事典』(天兒懸等編、岩波書店、九九年五月)に據った。尙、本文にも、「我彷彿聽見姐姐對媽媽說過、王瑞芬的父親是天津的大資本家、去年『五反』的時候、王瑞芬的表現非常之好。」(『全集』第四卷、二五二頁)と出てくる。このよ
うな社會のキャンペーンなどについては、陶奇が聞いた話としている。

(31) 陸文夫に關しては、拙論「庶民の哀歎——『横丁の奥で』から」(竹内實等編著『中國文學最新事情——文革、そして自由化のなかで』(サイマル出版會、八七年二月、所收)を参照されたい。

(32) この部分は倉石譯に據る。このソ連のことは、『全集』第四卷、二五〇頁などでは削除されており、ロシア語も「外文」になっている。吳林「讀『陶奇的暑期日記』」(『光明日報』五六年九月二十日、副刊『圖書評論』九〇)に據れば、「這本篇幅不算大的小説、她曾經作過不止一次的修改」と言っている。

(33) 『全集』第四卷、二六四頁。拙譯を掲げておく。

◇…(李春生は)振り返って范祖謀に「行こう—俺たち什刹海に泳ぎに行こう」と言った。范祖謀は眉にしわを寄せて「今日は時間がない。それに、『少年の家』に行つて繪を學ばなくてはならないんだ」と言った。林宜が「君は僕に泳ぎを教えると言つてくれたじゃないか? 僕はこの休みに泳ぎを覚えたいんだ」と言った。李春生が進み出て、「俺が教えてやるよ。教えるなんてどうということないよ。俺だって泳ぎがうまいんだから」と言った。范祖謀は「そう。君が彼に教えてやってくれ。もともと僕は泳ぎなんてどうも言うことないんだ」と言い終わると、自轉車を押し行つてしまつた。

孫家英は、彼が門を出て行つてしまふのを見ると「范祖謀って人はエ

ゴイストね」と言った。曾雪姣は門に手をかけて立つたまま、「あの人、勉強はとつてもできるし、どの面だつて一番じゃない!」と言つた。李春生は振り向くと「奴はエゴイストさ。エゴイスト過ぎるよ。一番、がなんの役に立つんだ。誰かが奴に何か難しい問題を尋ねると、奴はできないって言う。張先生が授業で聞くと、奴は全部でちまうんだ。人が奴になぜ友達を助けなかったんだと聞くと、奴は決まって目を剥いて罵る。やれ、依頼心が強すぎる、だとか、自分で努力しない、ってね。俺はね、たとえ零點くつたつて、こんなエゴイストに教える請いに行かないね。」と言つた。林宜は笑つて「彼もエゴイスト過ぎるが、君も努力しないよ。僕たちは團結して互いに助け合えば良いんだ。さあ、君は僕に泳ぎを教えてくれよ。」と言つた。

(34) 『老舍選集』(『新文學選集』第二輯、開明書店、五一年八月初版)「自序」十三頁。老舍について言及したのは、リディア・リウ著、中里見敬譯(翻譯)ホモ・エコノミクスと小説的リアリズムの問題」(『言語文化論究』第十三號)を讀んだ事による。ここでは、また次のようにも言う。「結局のところ、一九五〇年代における數回の改訂を経て、老舍は祥子の個人的運命を強調した初期の作風を撤回して、大衆動員に基づくバラ色の展望に肩入れすることになる。」(八頁)。

(35) 『全集』第四卷、二五六頁。

(36) 『全集』第四卷、二七七—二七八頁。

(37) 例えば、冰心「老舍和孩子們」(『全集』第六卷、六七四—六七八頁)で自分の長女と二女とが老舍原作の「龍鬚溝」という映畫を見た感想を、陶奇と小秋の會話にして使つてゐることを述べてゐる。なお、この「老舍和孩子們」は、『晚晴集』(百花文藝出版社、八〇年九月)に入れられたが、その時にあつた、「感謝華主席」という言葉は『全集』では削られてゐる。また、舒濟編『老舍和朋友們』(生活・讀書・新知三聯書店、九一年十月)にも採られてゐるが、そこでは後半の六行ほどが削除され

ている。

(38) 『全集』第四卷、二七七—二七八頁。拙譯を掲げる。

◇今日は、「八一」解放軍記念日です。朝起きるとお姉さんが、私と秋ちゃんに解放軍の話をしてくれました。そして、わたし達に黒板新聞に書いた原稿を見せてくれました。そこには次のように書いてありました。

「一九二七年の春、祖國の革命勢力が大いに強く發展している時、革命を偽裝していた蒋介石が回れ右をして革命者に對して攻撃をしました。その年の四月十二日、惡辣な蒋介石一味は上海で大量の共產黨員や革命的労働者や農民それに學生を虐殺し、革命戰爭に挫折をもたらしました。革命を挽回するために、その年の八月一日、朱德、周恩來、賀龍などの同志達は江西の南昌で、三萬人餘りの革命軍を率い、武裝蜂起をしました。間もなくこの部隊は井岡山で毛主席が指導する革命軍と合流し、中國勞農赤軍第四軍を建軍しました。その時から、中國人民は自分たちの武裝力を持ったのです。そして、このますます強大になった人民解放軍は、二十六年來、苦しい闘争を経て、ついに惡辣な蔣一味と帝國主義勢力を追い拂い、わたし達を解放し、わたし達が今日このような平和で楽しい日々を送れるようにしました。わたし達はあの人たちに感謝し、あの人たちを熱愛し、あの人たちに學んで、祖國を愛し、人民を愛し、さねばなりません。そして、困難を克服する勇敢で頑強な精神に學ばねばなりません。社會主義社會を建設するために、自分のすべての力を捧げねばなりません。」

(39) 倉石武四郎はその「あとがき」で、次のように言う。「ただこれは、いうまでもなく中國の少年少女たちのために書かれたものであり、そのある部分は日本の少年少女たちにとってわかりにくく、また必ずしも適切でないところがありますので、かってながらその部分を削りました。その點、作者にたいし、深くおわびを申しあげます。」(同注25。二四五

謝冰心の作家魂

二四六頁)。

(40) 既に述べたように、倉石譯との異同があることと、注32)に挙げた、吳林の言葉などがあって、かなり書き直しをしたように思える。

(41) 『人民日報』五八年三月十八日、第八面。

(42) 「中國作家協會發出響亮號召 作家們！躍進、大躍進」『人民日報』五八年三月八日。

(43) 冰心は「對東風的感謝」『人民文學』五八年第四期(『全集』第五卷、二四頁)を書いて、この呼びかけに應じている。また、『再寄小讀者』「通訊一」の出だしはこうなっている。

◇似曾相識的小朋友們：／先感謝『人民日報』副刊編輯的一封信，再感謝中國作家協 作家們！躍進！大躍進！的號召，把我的心又推進到我的心窩裏來了！

なお、『全集』(第五卷、一三頁)では、「作家們！躍進！大躍進！」の部分削除されている。

◇自從決心再給們寫通訊，我好幾夜不能安眠。今早四點鐘就醒了，睜開眼來是滿窓的明月！我忽然想起不知是哪位古詩人寫的一首詞的下半闕，是：「卷地西風天欲曙，半簾殘月夢初回，十年消息上心來。」就是說：在天快亮的時候，窗外刮着卷地的西風，從夢中醒來看見了淡白的月光照着半段窗簾；這裏「消息」兩箇字，可以當作「事情」講，就是說，把十年來的往事，一下子都回憶起來了！(『全集』第五卷、一四頁)。

ここの「下半闕」は、陳寅恪『柳如是別傳』(『陳寅恪文集之七 柳如是別傳』上海古籍出版社、八〇年八月)に據れば、次のように言う。

◇顧貞觀成德全選今詞初集下宋徵輿浣溪沙云：／徹夜清霜透玉臺。夕香銷盡傳山灰。聲聲飛鴈五更催。滿地西風天慾曉，半簾殘月夢初回，十年消息上心來。(同上書、上、二四四頁)。

したがって、清の宋徵輿の「浣溪沙」の「下半闕」である。

このことは、奥村佳代子關西大學助教及び陶德民關西大學教授より
 教示を受けた。記して謝意を表する。

(44) 「付表Ⅱ」を参照して欲しい。

(45) ざっと、この間に書いた散文を挙げると、

- 1 「向左轉、開歩走」『光明日報』五八年二月十六日〔全集〕未收
- 2 「我們這裏沒有冬天」『人民日報』五八年二月二十六日〔全集〕第
 五卷、四頁
- 3 「跟小朋友談訪埃及觀感」〔全集〕第五卷、九頁
- 4 「給西紅門鄉一位小朋友」『兒童文學叢刊』五八年第二期〔全集〕
 第五卷、一五頁
- 5 「北京的聲音」『北京日報』五八年三月二十一日〔全集〕第五卷、
 一八頁

などがある。また、詩に「春風得意馬蹄疾」『詩刊』五八年第二期
 〔全集〕第五卷、三頁〕があり、「呼嘯一時的西風過後、／追到前頭
 的、是／豪邁駑蕩的東風／挾帶着一天的春氣！(中略)朋友、這／空
 前、僅僅是箇開始、／東風還要徹底地壓倒西風、一年、五年、十五年、
 五十年、／我們面前還有無數箇奮鬥的春天！」と元氣良く歌う。

(46) 「七 我的老伴——吳文藻(之二)」〔全集〕第八卷、四三頁。や、

「周恩來總理——我所敬仰的偉大的共產黨員」〔全集〕第九卷、一一四
 頁〕などで冰心自身が書いている。吳文藻自身は、「五八年四月因被錯
 劃爲右派而受到了撤銷教研室主任的處分、並被剝奪了教書權、送社會主
 義學院學習。」〔晉陽學刊』八二年第六期、五一頁〕と書いている。尙、
 晉陽學刊編輯部編『中國現代社會科學家傳略』第六輯(山西人民出版社、
 八五年九月)も、『文獻』雜誌編輯部・『圖書館學研究』編輯部編『中
 國當代社會科學家』第八輯(書目文獻出版社、八六年十一月)も同じで
 ある。

(47) 王炳根『世紀情緣 冰心與吳文藻』(安徽人民出版社、九九年十月)

では、吳文藻が衝撃を受けて歸宅後、冰心の援助を受けた場面を描いて
 いる。もし、五八年四月のことであるならば、冰心は北京にはいず、
 「付表Ⅱ」からわかるように、イタリアアサイスに居ることになる。

また、陳恕・吳青夫婦が書いた「吳文藻」という文章でも、「五七
 年、吳文藻先生被錯劃爲右派、使他的才華被壓抑了二十多年、直等十一
 屆三中全會後、他的右派問題才得到改正。」と言って、やはり五七年の
 こととしている。

右派とされたのがいつかという問題であるが、今、一時的な結論とし
 ては、やはり吳文藻は五七年十月(これは、吳文藻の日記を見たこと
 ある王炳根氏の教示である。記して謝意を表す)に中央民族學院で右派
 とされ、五八年四月に、「教研室主任」を取り消され、「社會主義學院」
 での學習に送られたのだと思う。尙、「七 我的老伴——吳文藻(之二)」
 〔全集〕第八卷、四六頁。に據れば、「正在這時、周總理夫婦派了一輛
 小車、把我召到中南海西花廳、那所簡朴的房子裏。」と言って、周恩來
 の援助があったことを述べる。周總理夫妻から冰心に、夫・吳文藻を援
 助するように言われたという。しかし、これはいつのことか、巧妙に期
 日は隠されているような気がする。そして、この時一番心外に堪えなかつ
 たのは「反黨反社會主義」という罪名であったという。

(48) 長男・吳平は、國家二機部航空工業局の研究設計員であった。「付表
 Ⅱ」からわかるように、五八年三月に右派とされ、六一年十月二日に右
 派分子という帽子が取れた。王炳根『世紀情緣 冰心與吳文藻』(安徽
 人民出版社、九九年十月)に詳しい。また、弟・謝爲楨も、五八年四月
 二十二日に右派とされたという。(岡田祥子「蕭乾と冰心」『研究誌 季
 刊中國』No.七三 二〇〇三年夏季號。「中國文學あれこれ」六三)。

(49) 「通訊十一」〔全集〕第五卷、一四三頁。
 (50) 「通訊十一」〔全集〕第五卷、一四六頁。

(51) 同注15)及び、卓如『冰心年譜』(海峽文藝出版社、九九年九月)。

(52)

「一面堅決地鬭争、一面徹底地改造」『新華半月刊』五十七年十七號、五一—五二頁。尙、この發言稿は『全集』には未收である。福建長樂市にある冰心文學館のホームページに據れば、冰心の遺留品が二〇〇四年三月に文學館に寄附されたそうなので、手紙・日記などが公開されるのを待ちたい。

付表 I 冰心の外遊

卓如『冰心年譜』（海峽文藝出版社、九九年九月）より作成。
一九五三年から、五六年まで。●印は國內の主な活動。

1900年	月	日	場所	團長	團名など
53	11	27	インド	丁西林	中印友好協會訪問團。中印友好協會成立大會。
	12	7			ミャンマーのヤンゴンを経てインドのカルカッタ、
	12	8			デリー
54	1	12			カルカッタを離れる。
	1	16			ミャンマーのヤンゴンに着く、
	1	20			ヤンゴンを離れる。
	1	23			ベナン着。
	2	4			歸國。
55	4	2	インド	郭沫若	中國代表團。亞非國家團結會議。
	4	6~21			デリーでの會議
	4	22			インドを離れ歸國。
55	6	29	スイス	李徳全	中國婦女代表團。世界母親大會。
●55	7	5~30	北京		第一屆全國人民代表大會第二次會議。
55	8	2	日本	劉寧一	中國代表團。原水爆禁止世界大會。北京から武漢を経て廣州。
	8	9			東京、羽田着。
	8	27			ホンコン到着。
	8	28			廣州から從化溫泉へ。
●55	12		福建		全國人民代表大會代表として福建省内を視察。
●56	6	15~30	北京		第一屆全國人民代表大會第三次會議。
●56	7				雷潔瓊・嚴景耀の紹介により、中國民主促進會に加入。吳文藻も同時加入。
●56	8	11~23	北京		中國民主促進會第二次全國代表大會。第四屆中央委員會委員に選ばれる。

付表Ⅱ 『再寄小讀者』「通訊」作成地一覽表

卓如『冰心年譜』（海峽文藝出版社、九九九年九月）を基に作成。
五七年から、六一年まで。●印は國內の主な活動。

謝冰心の作家魂

1900年	月	日	場所	記事
●57	春		江蘇省	南京、鎮江、揚州、無錫、宜興、蘇州等の都市を訪問、
	4	25	揚州	揚州市の文藝界朋友と座談、並びに記念寫眞。
	5	1		『人民日報』中共中央「關於整風運動的指示」
	5	6		中共中央「關於繼續組織黨外人士對黨政犯錯誤缺點展開批評的指示」
	6	8		『人民日報』社論「這是爲什麼？」
	6	9		『人民日報』毛澤東「關於正確處理人民內部矛盾的問題」
●57	6/25~7/15		北京	第一屆全國人民代表大會第四次會議。
	6	28		人民代表の右派分子批判始まる。
	7	1		『人民日報』社論『文匯報的資產階級方向應該批判』
	7	12		冰心の發言「一面堅決地鬪爭，一面徹底地改造」
57	10			夫・吳文藻右派分子とされるか？
57	12	20	エジプトへ	中國代表團。亞非人民團結大會。モスクワ周り。
	12	22	チェコで乗り継ぎ カイロへ。	
58	1	10	北京に戻る。	
58	2	3		『人民日報』社論「鼓足干劲，力爭上游」
●58	3	8		『人民日報』「中國作家協會發出響亮號召 作家們！躍進，大躍進」
			十三陵ダム	⇒呼びかけに應え、十三陵ダム工事現場に行き労働に参加。
58	3	11	北京	『再寄小讀者』「通訊」一、『人民日報』3月18日
58	3	15	北京	『再寄小讀者』「通訊」二、『人民日報』3月25日
58	3	20	北京	『再寄小讀者』「通訊」三、『人民日報』4月7日
58	3	21	ヨーロッパへ。	許濂新團長。中國文化訪問團。
58	3	25	イタリー到着。	
58	3			長男・吳平右派分子とされる。
58	4	2	パリ（イタリー）	『再寄小讀者』「通訊」四、『人民日報』4月23日
58	4	6	ローマ	『再寄小讀者』「通訊」五、『人民日報』5月6日
58	4		ベニス	『再寄小讀者』「通訊」六、『人民日報』5月12日
58	4	20	スイスへ	
58	4	21	ベルン（スイス）	『再寄小讀者』「通訊」七、『人民日報』5月29日
58	4	22	イギリスへ	
58	4	22	上海	弟・謝為楨右派分子とされる。
58	4		北京	夫・吳文藻右派分子とされ、教研室主任をはずされる。學習のため、社會主義學院へ。
58	5	2	エジンバラ（英國）	『再寄小讀者』「通訊」八、『兒童文學叢刊』第3號
●58	6		十三陵ダム	十三陵ダム工事現場に行き、労働し、文章の素材収集。
58	10	3	ウズベキスタン	茅盾・周揚・巴金正・副團長。亞非國家作家會議。
58	10	13	タシケント	亞非國家作家會議閉幕。
58	10	20	モスクワ滞在	冰心は中蘇友好訪問團に参加するようそのままモスクワに留まることを命ぜられる。
58	10	29	モスクワ	『再寄小讀者』「通訊」九、『兒童文學叢刊』59年4月第四集
58	11	2	モスクワ	『再寄小讀者』「通訊」十、『兒童文學叢刊』59年4月第四集
58	11	4	モスクワ	劉瀾濤 中國労働人民代表團の文化教育組に合流。十月社會主義革命41周年式典に参加。
58	11	29	北京に戻る	

付表Ⅱ (続き)

1900年	月	日	場所	記事
●58	11		北京	中國民主促進會第五屆中央委員會常委。
●59	3	18	河南省鄭州	東風水渠や黄河べりの花園口灌溉中心を參觀。のち、登封、邯鄲、三門峽等を參觀。
●59	4/18	~25	北京	第二屆全國人民代表大會代表第一次會議。
59	5	3	北京	周恩來總理、中南海紫光閣で座談會。報告「關於文化藝術工作兩條腿走路的問題」。
59	5	11	北京	『再寄小讀者』「通訊」十一「儂們多麼幸福」『兒童時代』59年6月第11號
59	6	8	北京	『再寄小讀者』「通訊」十二「七一前夕話西藏」『兒童時代』59年7月第13號
59	7	7	北京	『再寄小讀者』「通訊」十三「小黑兔和小黑豬的遭遇」『兒童時代』59年8月第15號
59	8	19	北京	『再寄小讀者』「通訊」十四「當新學年開始的時候」『兒童時代』59年9月第17號
59	9	9	北京	『再寄小讀者』「通訊」十五「光輝燦爛摘首都——北京」『兒童時代』59年10月第19號
●59	9	下旬	青龍橋	康莊人民公社岔道管理區の青龍橋分隊へ。
59	10	14	北京	『再寄小讀者』「通訊」十六「社會主義無限好，資本主義一團糟」『兒童時代』59年第21號
●59	10	底	豐臺	黃土崗人民公社の園藝隊で勞働し、參觀訪問。
59	11	12	北京	『再寄小讀者』「通訊」十七「他找到了力量的源泉」『兒童時代』59年第24號
59	11	13	北京	『再寄小讀者』「通訊」十八「感謝培養鮮花的園丁」『兒童時代』60年第1號
59	12	初	北京	吳文藻右派分子の帽子をはずされる。
60	1	17夜	北京	『再寄小讀者』「通訊」十九「向自然進攻，爲人類造福」『兒童時代』60年第4號
60	3	27	北京	『再寄小讀者』「通訊」二十「斬斷漢江築大壩」『兒童時代』60年第9期
●60	3/30	~4/10	北京	第二屆全國人民代表大會第二次會議。
61	3	24	日本	巴金團長、劉白羽副團長 中國作家代表團、亞非作家會議常設委員會緊急會議。
61	10	2		長男・吳平右派分子の帽子をはずされる。